

13. 小学校における柔道授業の継続に関する一考察 — 6年目の取り組み—

茨城大学	尾形 敬史
常北町立石塚小学校	青柳 江里
茨城県警察	小野村俊哉
日本ハム	サントス・ミドリ
熊谷市立籠原小学校	葛野 優維
八街市立八街北中学校	野々上 綾
常総市立岡田小学校	

13. Continuous 6 years Judo education at an elementary school

Takashi Ogata	(Ibaraki University)
Eri Aoyagi	(Ishitsuka Elementary School, Johoku, Ibaraki)
Midori Santosu	(Nippon Meat Packers, Ibaraki)
Syunya Onomura	(Ibaraki Pref. Police, Ibaraki)
Yui Kuzuno	(Kagohara Elementary School, Kumagaya, Saitama)
Aya Nonoue	(Yachimata North Junior High School, Chiba)

Abstract

In April 2006 (Heisei 18), the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology launched a project “introducing Budo into the elementary school physical education system” throughout the country to see the ability to adopt the Budo education system. Okada Elementary School in Joso city was chosen for the assessment, and the project was conducted for 3 years from the fiscal year 2006 to 2008. The summary for this project was released in the journal vol. 12 titled “Practical studies of introducing Judo into the physical education system at elementary schools”.

After this project was over in March 2009 (Heisei 21), Okada elementary school decided to continue their Judo class under the new name of “Budo class in physical education”. This study is to examine the last 6 years Judo education at Okada Elementary School. A survey was conducted

on teachers, students, and their parents. The injury occurrence data on students was also collected.

The result shows that under the curriculum which fits to the student's physical ability and development, students find Judo more interesting and have a further interest to Budo overall. Also, through the Ukemi (break falls) and Tai-sabaki (body control) practice, students learned how to prevent injuries on their faces, and as a result, the total number of children for having a medical care at school decreased.

I. はじめに

2006（平成18）年度から文部科学省では小学校に武道導入の可能性を探る「小学校における武道実践事業」を全国で展開した。常総市立岡田小学校では、この事業を2008（平成20）年度までの3年間実施し、その成果は本紀要第12輯（2009）に「小学校における体育授業への柔道導入の実践的研究として」発表されている。

さらに岡田小学校では、2009（平成21）年度から独自の取り組みとして「体育科武道（柔道）授業」を実施している。

本研究では、2011（平成23）年度、6年目を迎えた授業について、2つの仮説「発達段階に応じた柔道の指導をすることで、柔道の楽しさやおもしろさを味わい、武道に興味を持つ児童を育てることができる」「柔道の基本である受け身や体さばきを習得することで、児童の学校生活の中でのケガ防止に繋げることができる」に基づき、柔道授業の在り方について検討を行った。

II. 対象と方法

(1) 研究の対象

体育科武道（柔道）授業は、常総市立岡田小学校において、全児童471名を対象として平成23年10月18日～11月22日まで行われた。

授業時間等は以下の通りである。

1学年（3クラス、75名）及び2学年（2クラス、74名）は5単位時間（45分×5回）、3学年（3クラス、85名）は6単位時間（45分×4回、90分×1回）、4学年（3クラス、85名）は6単位時間（90分×3回）、5学年（2クラス、72名）及び6学年（2クラス、77名）は8単位時間（90分×4回）

授業は、平成23年度の研修を受けた学級担任15名と、GT（ゲストティーチャー：授業協力者）が協力して進められた。

(2) 研究の方法

① 研修会

平成23年8月10日に、常総市立岡田小学校体育館において、柔道授業の実技指導研修会が行われた。岡田小学校担任教諭全員が参加し、尾形敬史茨城大学教授が講師を務めた。

② アンケート

岡田小児童、担任教員、児童保護者、岡田小を卒業した子とそうでない子が在籍する石下西中学校1年生（中学校の柔道の授業はまだ受けていない）に対するアンケートを行った。アン

ケートの内容は「結果と考察」を参照。

③ ケガの調査

研究授業が開始される前の平成17年度、開始後の18年度から22年度までの6年間のケガによる保健室利用者数、ケガの発生数を部位別に集計し、ケガの傾向を検討した。また、同市内にある岡田小と同規模小学校のデータを対照群として使用した。

④ 体力の調査

平成18年度から6年間の体力テストの結果について比較した。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 授業への取り組み

① 実技研修会

柔道指導の実技研修会は夏休み期間中に行われ、平成19、20年度は3回、21年度は2回、22、23年度は各1回行われた。

内容は授業で実施する動きや基本動作、技などであるが、研修会が3回から2回、1回へと減少したのは、教員の移動に伴う各年度の新任は約30%だが、複数年の経験者が増えて来たことにより、経験者が指導に回るなど充実した研修が行われているためである。

② 授業内容

授業は学級担任が主体となって進められ、児童一人ひとりの個性を把握している担任は、個々を生かしながら楽しい授業づくりを行うことができていた。

専門的な技術（投げ技）の示範には、G Tと共にスポーツ少年団で活動する児童を生かすことができ、児童たちの学習意欲を刺激しながら授業ができたと思われる。

授業は、以下に示す「6年間の学習計画」を基に行われた。

	柔道あそび（基本の運動）		柔道（武道）			
	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1時目	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・柔道衣の着方 ・礼の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・柔道衣の着方 ・礼の仕方 ・前年の復習 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・柔道衣の着方 ・礼の仕方 ・前年の復習 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・柔道衣の着方 ・礼の仕方 ・前年の復習 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・柔道衣の着方 ・礼の仕方 ・前年の復習 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・柔道衣の着方 ・礼の仕方 ・前年の復習
2時目	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きをまねた運動（くま・くも・かえる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きをまねた運動（後ろ転がり） ・後ろ受け身（2人で組み中腰） 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きをまねた運動（川とび） ・横受け身（2人で組み中腰） 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きを真似た運動（えび） ・体さばきと崩し ・横受け身（立ち姿勢） ・にげ方（足からめ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きをまねた運動（逆えび） ・受け身 ・にげ方（ブリッジ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きの運動 ・体さばき ・膝車 ・大腰 ・約束技から袈裟固め
3時目	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きをまねた運動（だるま・前転） ・転び方（1人で長座・中腰） 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の動きをまねた運動 ・横受け身（長座・中腰） 	<ul style="list-style-type: none"> ・横受け身 ・袈裟固め 	<ul style="list-style-type: none"> ・体さばきと崩し ・片膝つき膝車 ・袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ・受け身 ・片膝つき膝車からの袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ・体さばき ・膝車 ・大腰 ・約束技からの袈裟固め

4時目	<ul style="list-style-type: none"> 動物の動きをまねた運動 転び方(2人組の長座・中腰) 後ろ受け身(長座) 	<ul style="list-style-type: none"> 動物の動きをまねた運動 横受け身(2人組の長座・中腰) 組み方(右自然体) 	<ul style="list-style-type: none"> 横受け身 袈裟固め にげ方(腕を抜いて膝立ち) 	<ul style="list-style-type: none"> 片膝つき膝車 袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 受け身 体さばきと崩し 膝車 大腰(足さばき) 相対膝つきから袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 膝車 大腰 約束技から袈裟固めゲーム
5時目	<ul style="list-style-type: none"> まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 横受け身 袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 片膝つき膝車から袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 膝車 大腰(腰に乗せる) 相対膝つきから袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 膝車 大腰 約束技から袈裟固めゲーム
6時目	※1, 2年生の2人組は握手		<ul style="list-style-type: none"> まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 膝車 大腰(腰に乗せる) 相対膝つきから袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 試合
7時目			※袈裟固めゲームは10秒で1本		<ul style="list-style-type: none"> 大腰(腰に乗せる) 膝車からの袈裟固めゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 試合
8時目					<ul style="list-style-type: none"> まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> まとめ

低学年では「柔道あそび」を基本とした授業、3学年以上では基本的内容に固め技、投げ技が加わり、4学年以上では2時間連続での授業とすることで、「なか」の時間が十分に確保でき、柔道の楽しさをより感じる授業を展開することができていた。

③ 柔道衣

柔道衣は、平成18(2006)年度に教材として用意されたものを使用している。

多目的教室「ふれあいルーム」に吊して管理され、柔道衣には通し番号が付けられ、児童は身体の大きさにあったものを使用する。授業が全て終了したら、各家庭に持ち帰り洗濯し、再び「ふれあいルーム」で管理される。低学年の柔道衣は、下穿きのウエストにゴムが通され、上着には帯が縫い付けられ、簡易に着られるように工夫されている。

④ 授業を行う場所

平成18年度以来使用していた、隣接する常総市立石下西中学校の柔道場は、東日本大震災による損傷の改築工事のため、23年度は使用でき



ふれあいルームの柔道衣

なかった。

そのため10月から11月にかけて行われた授業は、前半は小学校の体育館に60枚の畳を敷き、嘉納治五郎師範の写真を飾って行われ、後半は「ふれあいルーム」に64枚の畳を敷いた「道場」で行われた(図1)。畳は木材の枠で固定し、周囲の柱にはマットを巻き付けて安全管理が図られた。ここでは柔道衣に着替えた後、すぐ授業に移れるので、移動等の時間が大幅に短縮された。ここでも正面に嘉納師範の写真が飾られた。(図2)



図1：ふれあいルームの道場



図2：嘉納師範の肖像画

⑤ G T (授業協力者) の活用

岡田小では、G Tとして、外部の授業協力者を研究初年度から活用している。主なG Tとしては、茨城大学教育学部尾形研究室のゼミ生が、平成18年度(青柳恵里)、19年度(同)、20年度(小野村俊哉)、21年度(サントス・ミドリ)、22年度(葛野優維)、23年度(野々上綾)と協力している。また地域の柔道経験者もG Tとして、平成18年度(飯塚富雄、松崎恭三)、19年度(同)、20年度(同)、21年度(松崎恭三)、22年度(同)、23年度(同)と授業に協力している。

(2) アンケート結果について

岡田小学校全児童471名(事前・事後)、担任教員15名(事前)、保護者395名(事前)、岡田小学校での武道授業の経験を持つ生徒と持たない生徒が在籍する石下西中学校1年生134名を対象に、柔道授業に対する意識調査としてのアンケートを行った。

① 児童に対するアンケート結果

ア 柔道授業に対する意識

授業前の「柔道の授業は好きですか」に対して、「とても好き」「好き」と回答した児童は、平成19年度66%、20年度74%、21年度80%、22年度79%、23年度78%と、全体的に増加傾向である。(図参照、以下同様)

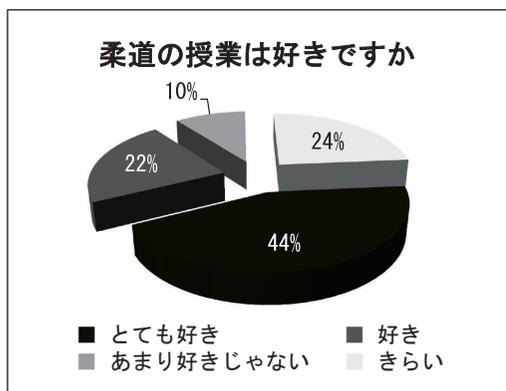
授業後の「柔道の授業は楽しかったですか」に対して、「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した児童は、19年度の88%から23年度は96%となり、多くの児童が楽しく授業に取り組むことができている。

発達段階に応じた指導計画のもとに授業を行うことで、柔道の良さを感じることができ、楽しいと感じることができたといえる。

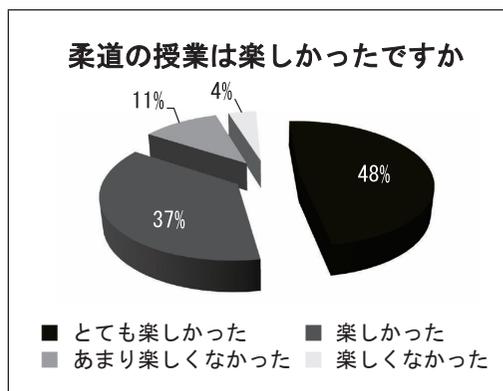
(授業前)

(授業後)

H19

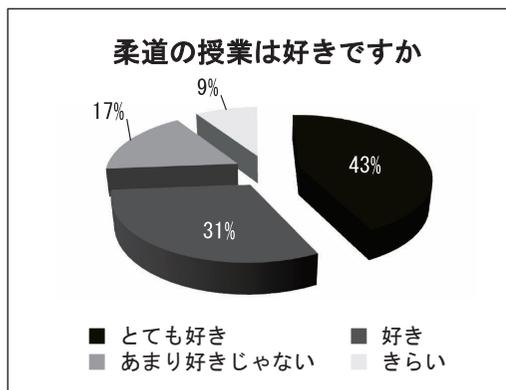


(平成19年7月実施 岡田小484名)

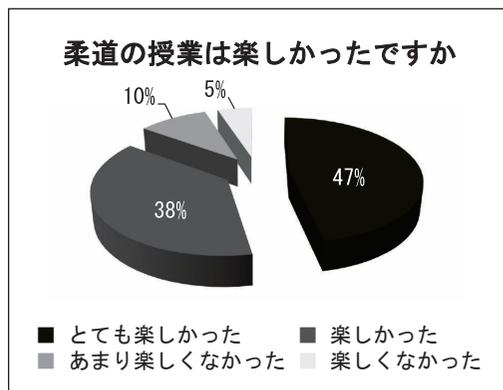


(平成19年11月実施 岡田小481名)

H20

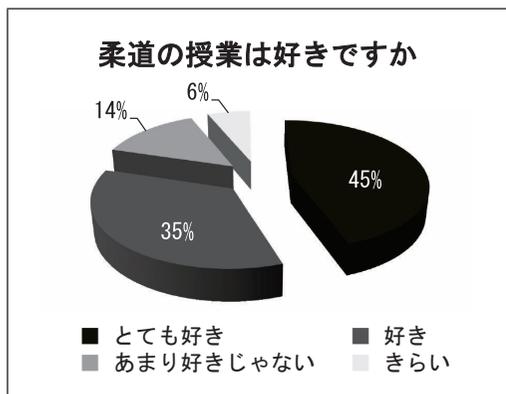


(平成20年5月実施 岡田小481名)

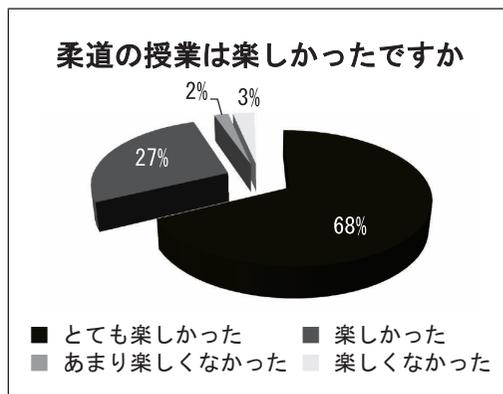


(平成20年6月実施 岡田小209名)

H21

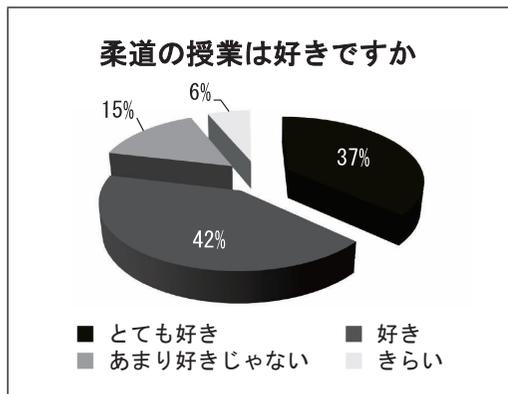


(平成21年10月実施 岡田小346名)

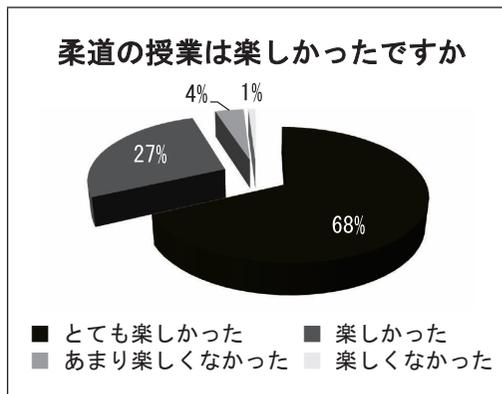


(平成21年12月実施 岡田小346名)

H22

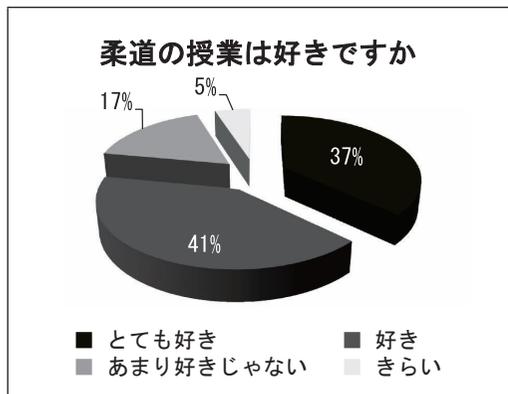


(平成22年11月実施 岡田小398名)

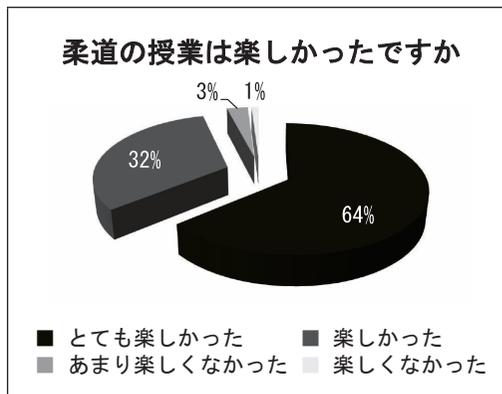


(平成22年12月実施 岡田小394名)

H23



(平成23年9月実施 岡田小372名)



(平成23年11月実施 岡田小454名)

イ 柔道の授業で楽しみなこと・やってみたいこと

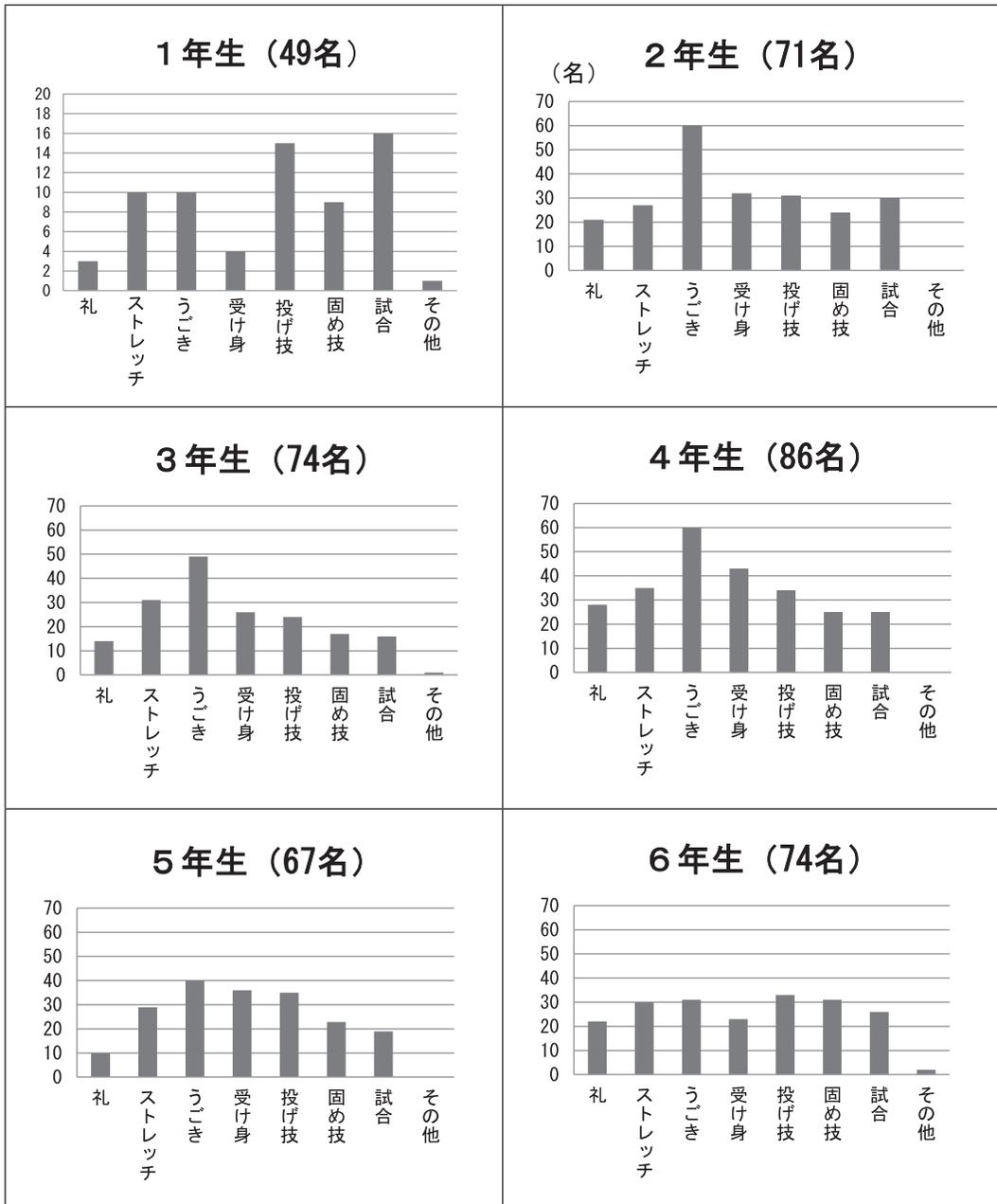
児童に対する事前の「柔道の授業で楽しみなこと、やってみたいことは何ですか」に対し、どの学年も「うごき（くま・くも・かえる）」の回答数が高い。日常生活では経験の少ない全身運動であり、楽しいと感じる児童が多いと思われる。（図参照、以下同様）

事後の「柔道の授業で楽しかったことは何ですか」に対し、低学年では、「うごき」、「受け身」、中学年では「うごき」、「固め技」、高学年では「うごき」、「投げ技」、「試合」の回答数が多く、その学年で新しく学習した内容の回答率が高い。これは、新しく習う内容に対する意欲・感心が高く、積極的に学習出来た結果であると思われる。6年生では、「試合」の回答数も多く、投げ技、固め技を使い、競い合うことの楽しさや、自分たちでゲームを行う楽しさを感じることができたと思われる。

「柔道の授業でもっとやりたいことは何ですか」に対し、1年生は、「うごき」の回答数が多いが、学習してない「投げ技」や「試合」を回答する児童も見られた。うごきや受け身などの基本動作のみを学習しているが、より高度な投げ技や試合に対する関心が高いということは、

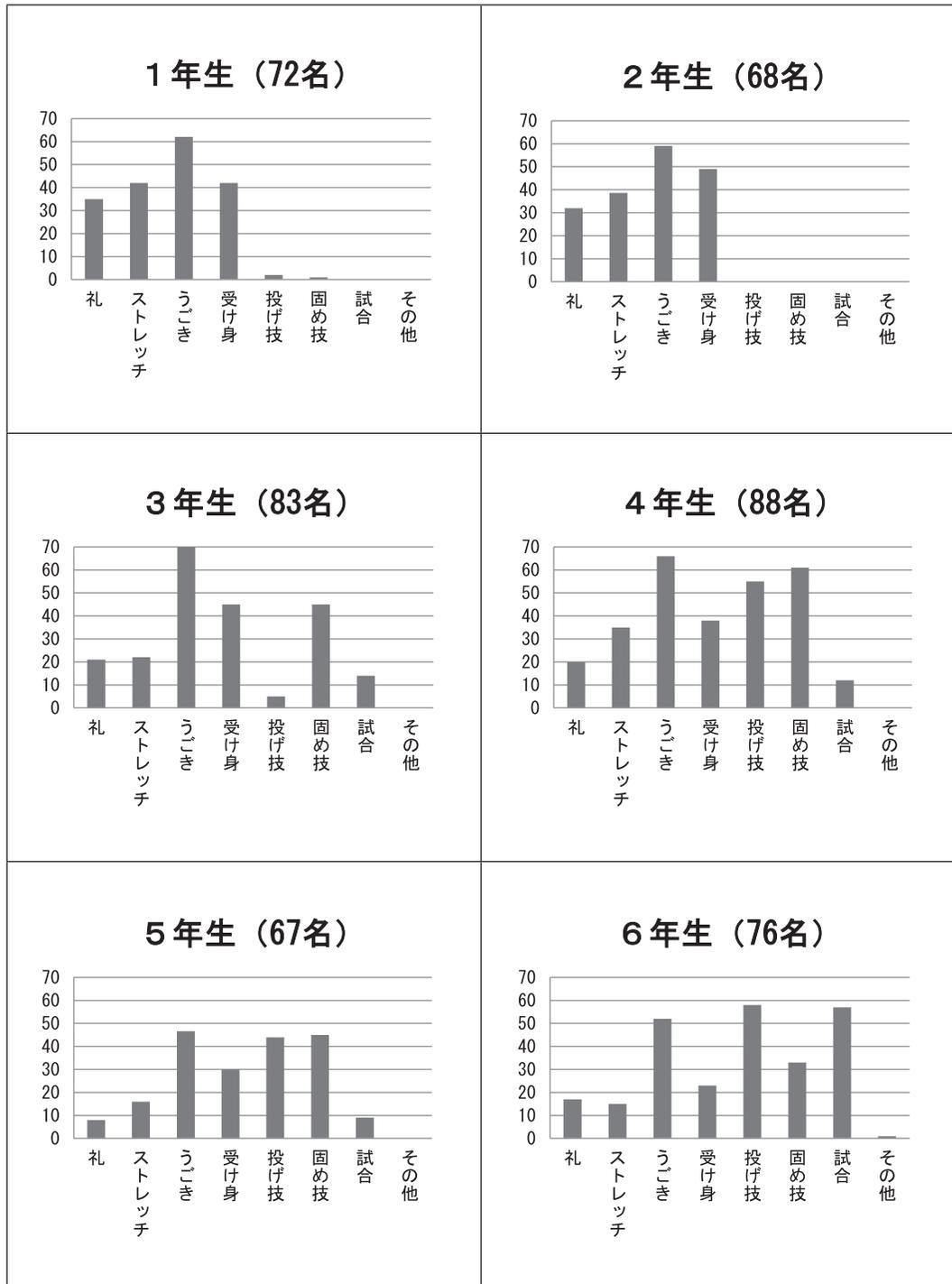
基本動作を行うなかで、柔道のうごきの楽しさに気付くことができたと言えるだろう。またテレビ観戦などにより、豪快な投げ技のイメージを持ち、投げ技や試合をやりたいと思っているものとも考えられる。

〈柔道の授業で楽しみなこと・やってみたいこと〉



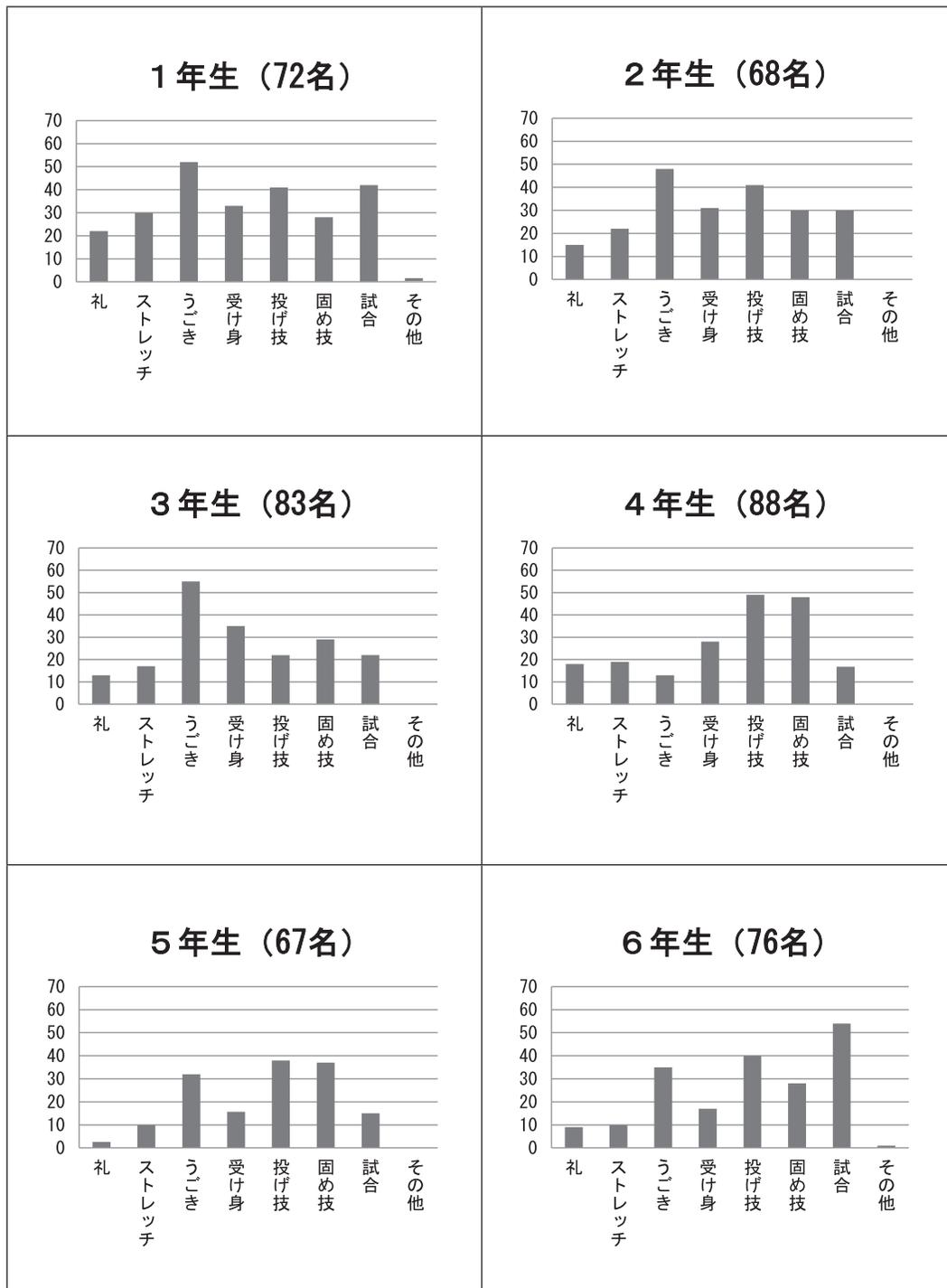
(平成23年9月実施 岡田小学校421名)

〈柔道の授業で楽しかったこと〉



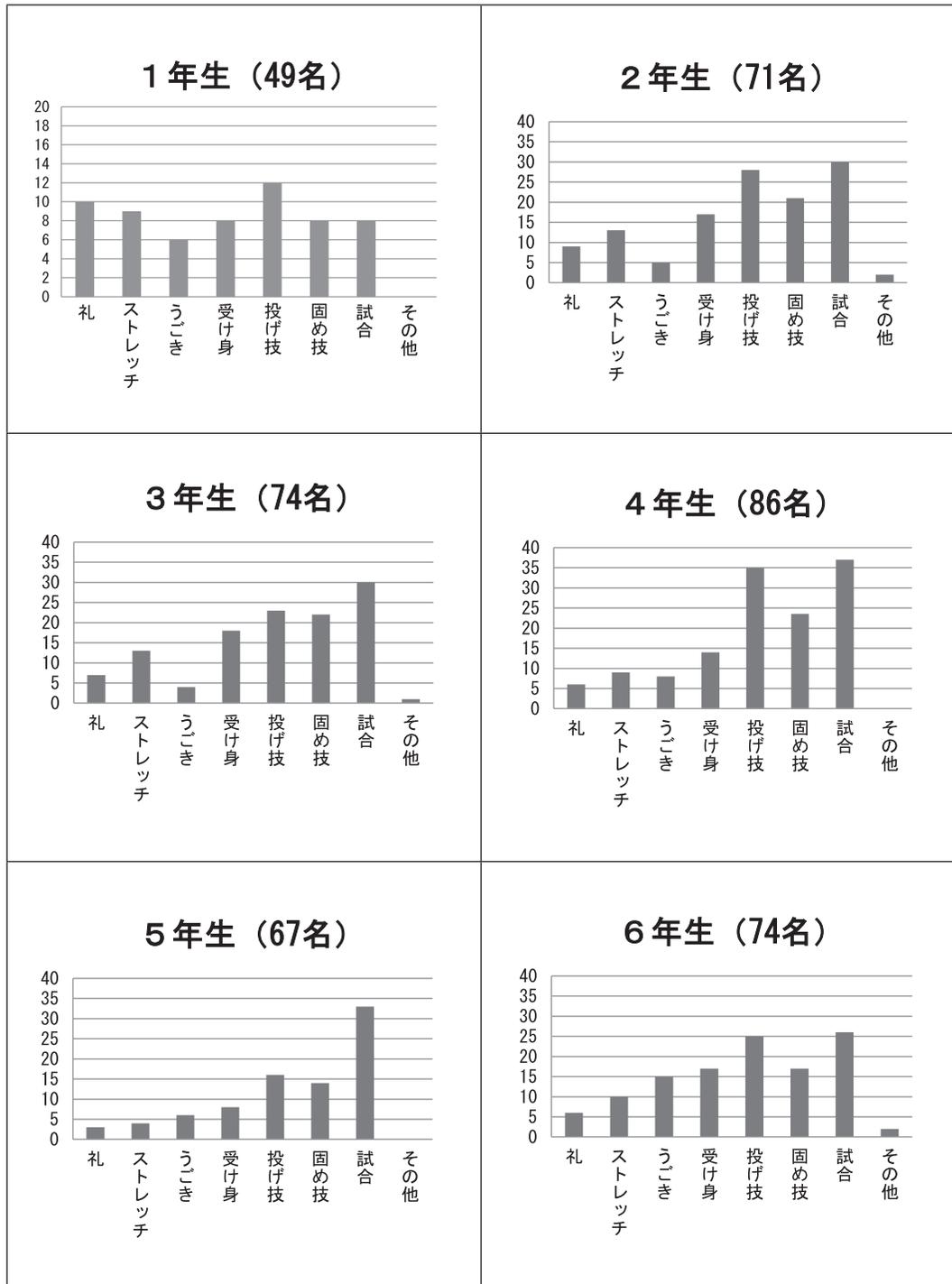
(平成23年11月実施 岡田小学校454名)

〈柔道の授業でもっとやりたいこと〉



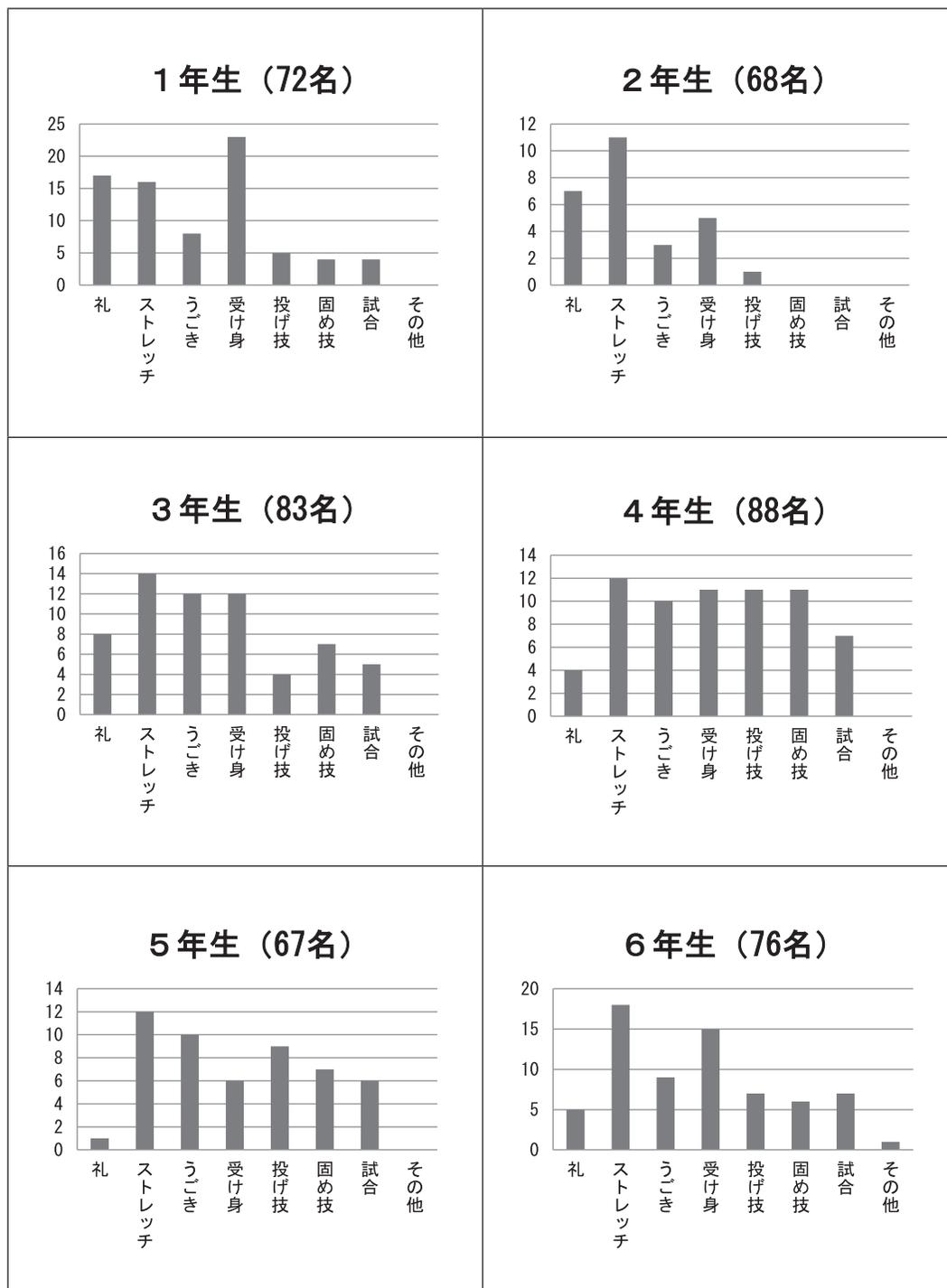
(平成23年11月実施 岡田小学校454名)

〈柔道授業で不安なこと・やりたくないこと〉



(平成23年9月実施 岡田小学校421名)

〈柔道の授業で嫌だったこと〉



(平成23年11月実施 岡田小学校454名)

ウ 柔道の授業で不安なこと・やりたくないことは何ですか

事前の「柔道の授業で不安なこと・やりたくないことは何ですか」に対し、全学年を通して「投げ技」「試合」の回答数が多かった。(図省略)

「投げ技」は、マット上での約束練習しか経験していないものの、児童たちには柔道選手の力強い「投げ技」のイメージが強く、投げ技ができるだろうか、ケガをするのではないかという不安を感じているためと思われる。授業での投げ技は、受と取を決めた約束的な練習であり、畳の上にさらにマットを敷いて安全に行われた。

「試合」では、乱取り稽古を想像している児童が多く、不安を感じているものと思われる。しかし授業での「試合」は、受と取を決め、約束的に投げ技で投げたあとに袈裟固めで抑え、そこからお互いに力を発揮し合う形式であり、安全に行うことができた。

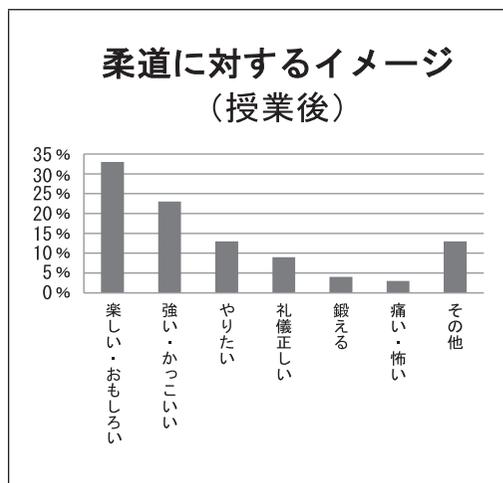
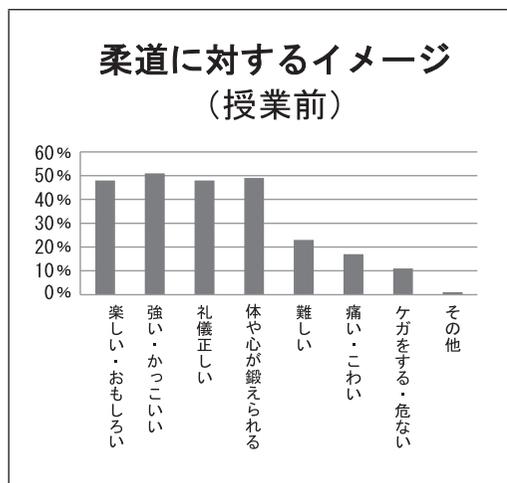
事後の「柔道の授業で嫌だったことは何ですか」に対し、1年生の回答は、「受け身」の回答数が多い。これは、児童の筋肉が未発達なため、受け身の時に行う、顎を引き後頭部を守る姿勢が十分にできず、つらく感じたためであると思われる。授業中にも、「首が痛い」という児童も多いた。しかし、授業後の感想で「首が痛くなったけど楽しかった」という発表もあった。2年生では受け身が嫌だったという回答数も少なくなっているため、児童の成長や経験を積むことにより、筋肉の未発達による筋肉痛と思われる首の痛さは徐々に解消されていくであろう。

2年生以上の回答数が多い「ストレッチ」では、授業中に「痛い」「できない」と言っている児童もいた。「体が硬くて嫌だ」という理由で嫌だと感じている児童が多いと考えられる。しかし、ケガ防止の観点からもストレッチは必要な運動である。「痛いけれど気持ちいいところで止めよう」「家で毎日少しずつでもいいから柔軟運動をしよう」などの声かけによって、児童のストレッチに対する意欲を高めることが可能と思われる。

エ 柔道に対するイメージ

事前アンケートの柔道に対するイメージでは、「楽しい・面白い」「強い・かっこいい」「礼儀正しい」「体や心が鍛えられる」などの、柔道に対して関心の高いと思われる選択肢は、全

〈柔道に対するイメージ〉



児童の50%近くが回答している。「痛い・怖い」は16.4%、「ケガをする・危ない」は10.7%の回答率である。(図参照)

事後アンケートでは、事前アンケートと同じく「楽しい・面白い」「強い・かっこいい」「やりたい」などの積極的意見が多かった。逆に、事前アンケートに比べ、「痛い・怖い」は全児童の3.3%、「ケガをする・危ない」は0.7%と、消極的意見は大幅に減少した。

発達段階に応じた授業内容により、受け身の繰り返し練習や、2人組の練習時に受け身をとらせるように繰り返し指導したおかげで、児童自身がケガをしないことを身をもって実感したため、柔道に対するケガのイメージが薄れたと考えられる。

② 教員に対するアンケート

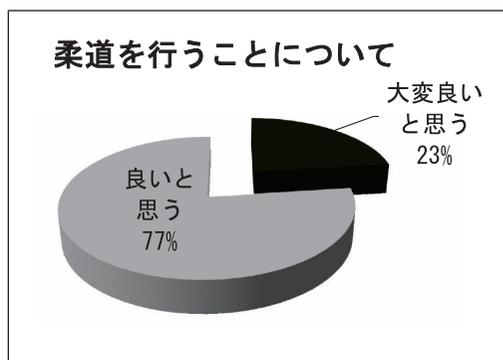
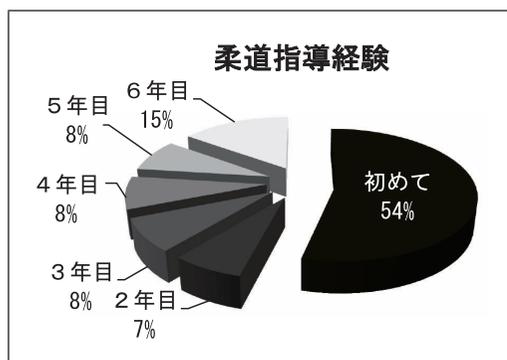
ア 柔道指導経験と柔道の授業について

今年度は、半数以上の担任教諭が柔道指導をするのが初めてであった。しかし、全教員が柔道の授業に対して「大変良い」「良い」と思っていることがわかった。(図参照)

理由をみると、礼儀作法や、柔道特有の全身を使う動きなどの良い点を評価していることが分かった。

これに対して、不安な点や問題点では、経験が全くないから不安、けがに関する不安の声があった。ケガに関しては、柔道の指導経験がないことを反映しているものと思われる。

このため、今後も研修会を充実する・授業例を提示することなどが必要であろう。特に、児童にありがちな行動やケガに関する対応について充実させることが必要と考えられる。



(平成23年9月実施 岡田小学校担任教員13名)

〈なぜそう思ったか〉(自由記述)

- ・楽しそう。
- ・なかなか体験できないことなのでよい。
- ・礼儀も身につけられるから。
- ・動きの運動で、楽しく、畳の上で抵抗もなく前転や後転を学べるから。
- ・普段あまり使っていない筋肉をほぐしながら、体が鍛えられると思う。
- ・礼に始まり、礼に終わる作法が気持ちいい。
- ・全身を動かす運動でよい。
- ・体幹が鍛えられ、あらゆる運動の基礎になる。
- ・自分の体を守ること、他人(相手)の体を守ることが学べるから。

- ・他校では経験ができない授業だから。
- ・日本の伝統あるスポーツに関われる。
- ・いろいろな体の使い方を知ることができる。

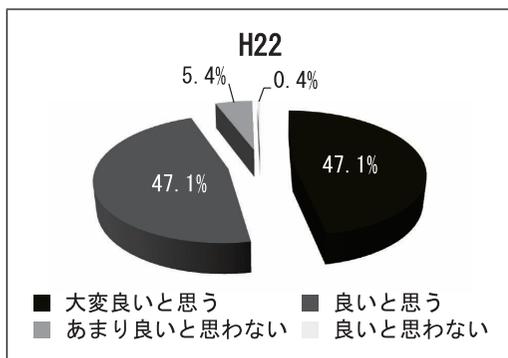
〈不安な点や問題点〉(同上)

- ・どう教えて良いかわからない。
- ・危険はないか、指導できるのか不安。
- ・1人で教えるのは不安。
- ・初めてなので何もかもが不安。
- ・低学年は着替えに時間がかかる。
- ・経験がないのでどのような危険があるのか予測がつかない。
- ・体育で他の種目ができなくなる。

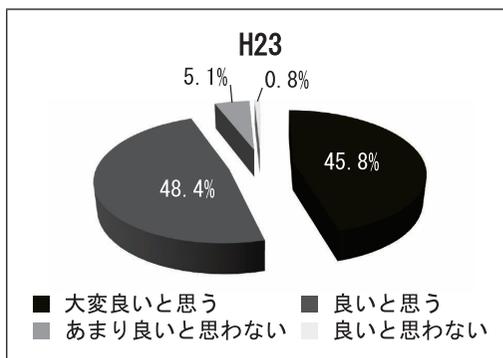
③ 保護者に対するアンケート

保護者の柔道授業に対する意識は、「大変良いと思う」「良いと思う」の回答率は94.1%であり、平成22年度の94.2%と比べ、大きな変化はない。(図参照、以下同様)

〈柔道の授業をすることについてどう思いますか〉

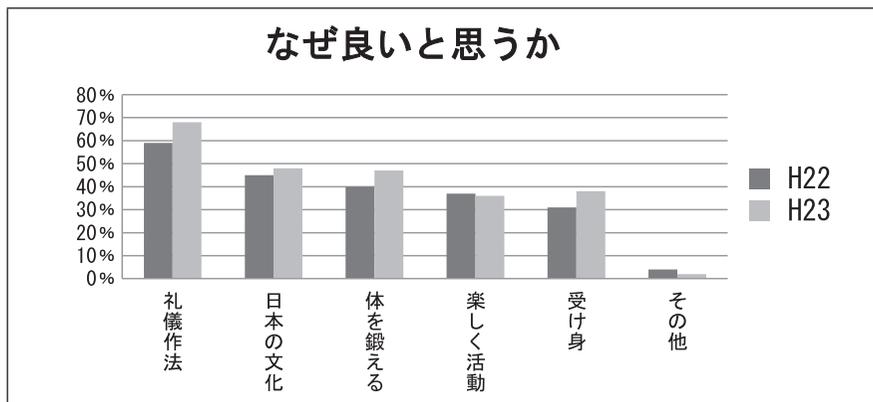


(平成22年11月実施 岡田小保護者267名)



(平成23年9月実施 岡田小保護者395名)

〈柔道の授業が良いと思う理由〉



「なぜ良いと思いますか」に対しては、「礼儀作法が身に着く」「日本の文化に触れられる」「体が鍛えられる」の回答率が高い。武道の伝統的な礼儀作法を身につけ、心を鍛えるという面に期待していると思われる。また、スポーツ少年団などに入団しない限りなかなか触れる機会のない武道に、体育の授業で触れられることは、子どもにより多くの経験をさせたいという保護者の願いに応えるものでもある。

これらの結果から、「礼儀作法」「日本の伝統文化」「心身を鍛える」という柔道の教育的効果に期待している保護者が多いといえる。

④ 石下西中生徒に対するアンケート結果

小学校の授業で柔道を経験したことがある（以下、「経験あり」とする）生徒に対して、「小学校の柔道授業を行ったうえで自分にとってよかったことはありますか」の質問では、「礼儀作法が身に付いた」と回答した生徒は64.0%、「楽しかった」と回答した生徒は65.3%であった。（図参照、以下同様）

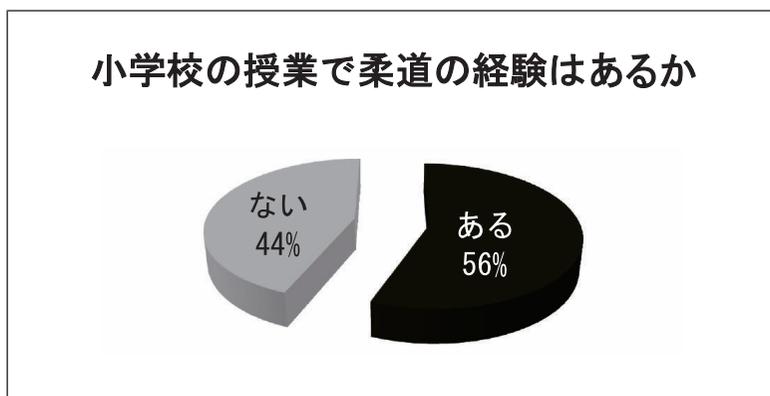
これは、発達段階に応じた学習内容を学習することによって、楽しい柔道を行うことができ、さらに柔道において最も重視される礼儀作法を子ども自身が意識して学習していることを反映した結果であるといえる。

「中学校の柔道の授業についてどう思いますか」に対し、経験ありの生徒が「とてもやりたい」「やりたい」と回答したのは59%、小学校の授業で柔道の経験のない（以下、「経験なし」とする）生徒は51%であった。「とてもやりたい」のみでは、経験ありの生徒24%、経験なしの生徒10%であり、2倍以上も差が見られる。経験ありの生徒の方が中学校の柔道授業に対する意識がやや高いことが分かった。

「柔道に対してどんなイメージを持っていますか」に対して、経験ありの生徒の回答は「強い・カッコいい」が27%、「礼儀正しい」「ケガをする・危ない」が共に20%である。

経験ありの生徒は、柔道を5年間行ったことで礼儀が身に付いたと思っているが、同時にケガをする・危ないとも思っている。一方、岡田小の事後アンケートでは、「柔道に対してどのようなイメージを持っていますか」に対して、「ケガをする・危ない」と思う児童は全児童の0.7%と極めて少ない。小学校のときと中学に進学してから、ケガに対するイメージが大きく変化

〈小学校の授業で柔道の経験があるか〉



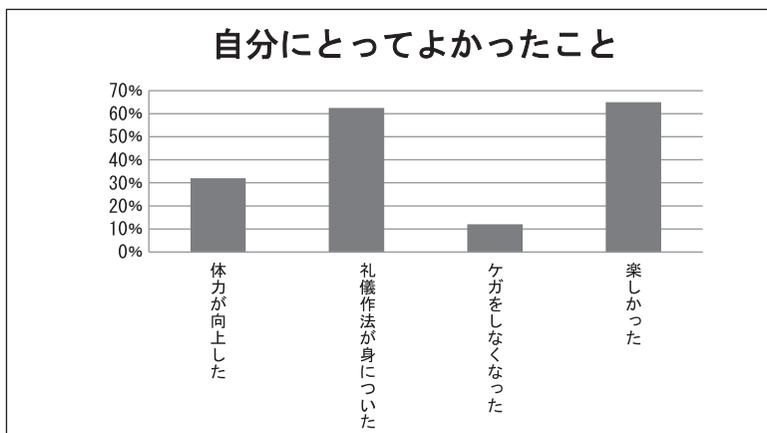
（平成23年11月実施 石下西中学校1年生134名）

している。これは、小学生は「柔道の授業」に対するイメージであるのに対して、中学生はまだ柔道の授業経験がなく、オリンピックなど競技柔道のイメージが回答に影響していたと考えられる。

経験なしの生徒に多い回答は「強い・かっこいい」「ケガをする・危ない」「痛い・こわい」が共に19%であった。経験ありの生徒に比べ、「礼儀正しい」は6.8%と低かった。

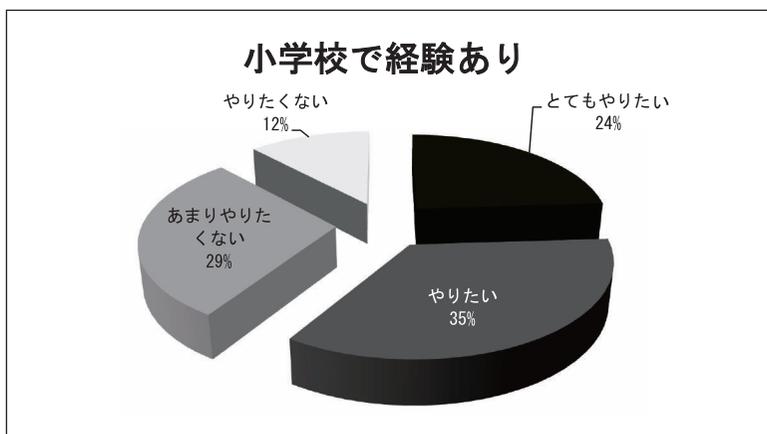
中学生は、経験あり無しに関わらず、柔道はかっこいいが、ケガをするものという印象が強いようである。そして、経験ありの生徒の方が、柔道の伝統的な礼儀作法を意識していることが分かった。中学校の柔道授業においては、受け身の習得とともに受け身を取らせる動作を指導する、段階に応じた指導を徹底するなど、安全を最優先し、柔道のよさ、楽しさを味わえる授業づくりをしていかなければならないだろう。

〈小学校の柔道授業で自分にとってよかったこと〉

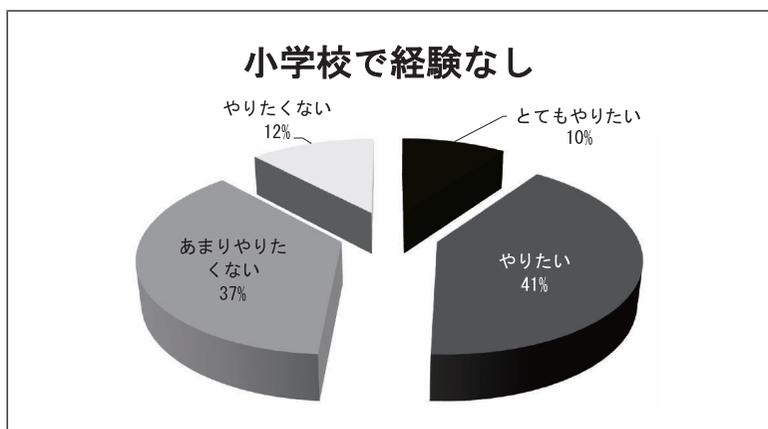


(平成23年11月実施 石下西中学校1年生134名中柔道経験者75名)

〈中学校の柔道授業に対する意識〉

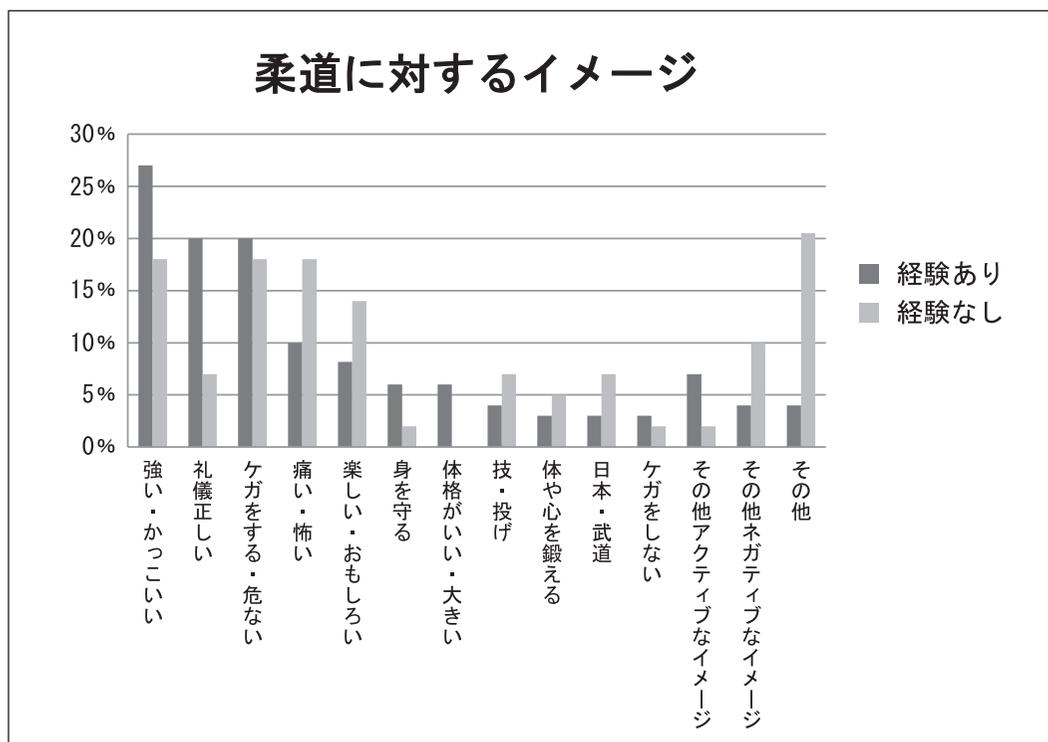


(平成23年11月実施 石下西中学校1年生134名中柔道経験者75名)



(平成23年11月実施 石下西中学校1年生134名中柔道未経験者59名)

〈柔道に対するイメージ〉



(平成23年11月実施 石下西中学校1年生134名)

(3) ケガの発生率について

岡田小学校において授業および校内活動中に発生した怪我について、武道（柔道）授業が始まる前年の平成17年度から22年度までの6年間の発生率・発生部位について比較し、年度ごとの

変化を調べた。

また、柔道授業を行っている岡田小と、柔道授業のない小学校2校とケガの発生割合を比較し、柔道の「受け身など」によりケガ防止効果があるのか調査することとした。なお、この2校は同市内にあり、全校児童数も同程度である。

ケガのデータは、岡田小学校と他の2校に協力を依頼し、養護教諭が来室者への対応結果を管理するソフトに記載されている18項目（擦過傷・骨折・捻挫・突き指・打撲・目の負傷・歯の負傷・耳の負傷・鼻の負傷・挫創・切傷・刺傷・虫さされ・つめの負傷・まめ）を、7項目（擦過傷・骨折・捻挫・突き指・顔の負傷・その他）にまとめて集計した。

① 保健室年間利用者数について

ケガによる保健室年間利用者数は、「保健室利用者数（ケガ）÷児童数」で数値を求めた。

岡田小では、柔道授業が始まった平成18年度から減少し、現状維持をしているといえる。21年度の91.4%に比べ、22年度は146.0%と増加しているものの、17年度の187.4%と比べると、年間来室数が児童1人当たり約2回に対し約1・5回である。また、22年度のA小学校（351.3%：児童1人当たり約3.5回）、B小学校（309.7%：児童1人当たり約3回）に比べると、岡田小は大幅に少ない。（図参照）

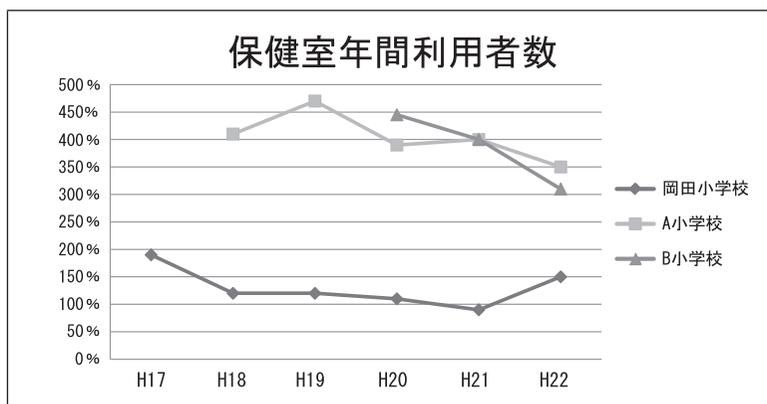
A小学校、B小学校は、岡田小学区に比べ、新興住宅が多く、都会的で、核家族が多い。祖父母と生活する家庭は少なく、親の過保護から、すぐに保健室に行きたがる児童が多いことも考えられる、との養護教諭の指摘もあった。

② 部位別のケガ発生率について

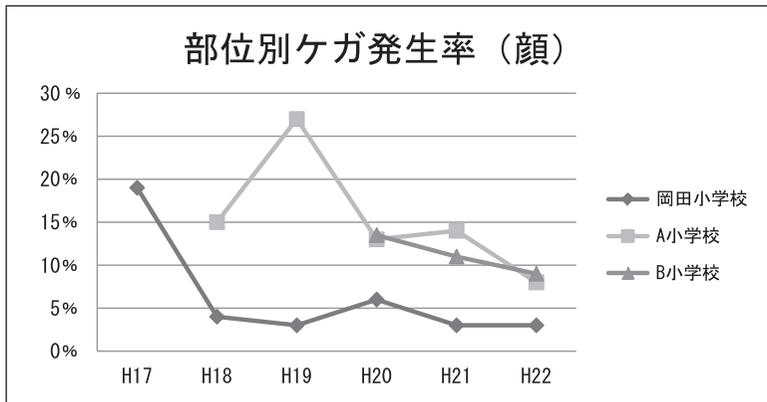
部位別のケガ発生率について、柔道の受け身は頭部を守るために有効と考えられるので、顔の負傷について比較することとした。柔道授業開始前の岡田小の平成17年度の数値は18.9%だが、開始後の18年度から低下し、20年度に一旦上昇（5.9%）しているものの、5%以下の低い数値を保っている。A校、B校に比べると、顔の負傷発生率は少ない。

以上のことから、岡田小は他の小学校に比べケガの総数は少なく、家庭環境の影響が考えられるものの、頭部のケガ発生率も少なく、柔道授業における受け身や体さばきなどの学習が、ケガ防止に繋がっていると考えられる。

〈年間ケガ発生率〉



〈部位別ケガ発生率〉



(4) 体力の変化について

体力の比較については、体力テストの評価A・B・C・D・E（Aの方が点数が高い）を（A+B）、（D+E）、（A+B）－（D+E）の3つに分けて比較した。（A+B）が増加し、（D+E）が減少することで、（A+B）－（D+E）の数値が高くなれば、体力が向上したものとする。

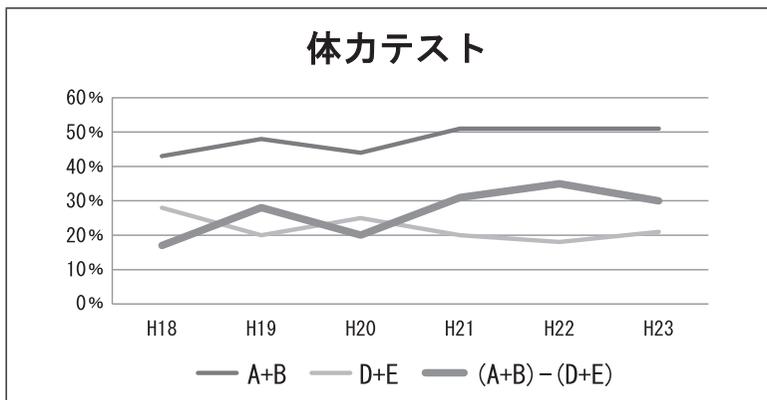
A+Bの数値は、平成18年度43.2%、19年度47.5%、20年度43.5%、21年度51.1%、22年度51.5%、23年度51.1%と推移している。20年度、23年度で一旦減少しているが、6年間全体で見ると、増加傾向にある。（図参照、以下同様）

D+Eの数値は、18年度27.0%、19年度19.7%、20年度24.3%、21年度19.1%、22年度16.9%、23年度20.3%と推移している。20年度、23年度では数値が増えているが、6年間全体で見ると、減少傾向にある。

（A+B）－（D+E）の数値は、18年度16.2%、19年度27.8%、20年度19.3%、21年度31.9%、22年度34.6%、23年度30.7%と推移している。20年度、23年度では数値が減少したが、6年間全体で見ると、増加傾向であると言える。

平成23年度は、22年度と比較すると、A+Bは0.4%減少、D+Eは3.4%増加している。この

〈体力の移り変わり〉



ことから、体力の高い児童はそれほど減っておらず、体力の低い児童が増え、体力の二極化の傾向があるといえる。

平成23年3月11日に起きた東日本大震災により常総市も大きな被害を受けた。福島第一原発の放射能問題の風評被害や、心への影響などから外遊びをする子どもが一時期減ったとも考えられ、23年度の体力テスト結果に影響を与えたと推測される。

平成23年度では(A+B) - (D+E)の数値は減っているが、6年間全体でみれば、柔道の授業開始以降、児童の体力は増加傾向にあるといえる。

IV. まとめ

(1) 仮説1について

発達段階に応じた柔道の指導をすることで、柔道の楽しさやおもしろさを味わい、武道に興味を持つ児童を育てることができる。

【成果】

授業実施前の石下西中学校生徒に対するアンケートの結果、中学校の柔道授業に対して、「とてもやりたい」「やりたい」と答えた生徒は、小学校での柔道授業の経験のある生徒59%、経験のない生徒51%となり、経験のある生徒の方がわずかに肯定的な意識を持っているが、「とてもやりたい」は24%に対して10%と倍以上の差が見られた。

柔道に対するイメージ調査においても、経験ありの生徒の方が「礼儀正しい」という柔道のよい面を感じていることが分かった。

発達段階に応じた学習計画に沿って授業を行うことで、児童は柔道の楽しさ、おもしろさに気づき、武道特有の「礼儀作法」を意識して学習することができ、武道に興味を持つ児童を育てることが出来ているといえる。

【課題】

今後も小学校における柔道授業をよりよく継続していくためには、実技指導法研修会のさらなる充実と共に、授業協力者であるGTを確実に確保する環境や体制整備が必要である。

(2) 仮説2について

柔道の基本である受け身や体さばきを習得することで、児童の学校生活の中でのケガ防止に繋げることができる。

【成果】

柔道授業開始前の平成17年度に比べて、岡田小では保健室利用者数は減少している。特に、顔のケガ発生率は、17年度の18.9%に対し、18年度4.2%、19年度3.3%、20年度5.9%、22年度3.5%と低い水準が保たれている。

柔道の受け身や体さばきは頭部を守るために有効であり、顔の負傷の減少に繋がったと考えられる。今後も柔道授業を継続することで、児童の安全な生活に貢献することができると予想される。

【課題】

よりよい授業継続のためには、環境や体制整備を行う必要がある。授業の中では、今までと同様に受け身などの基礎をきちんと指導し、安全に配慮した指導を行っていく必要がある。

研究同人

(平成23年度)

筈伸之・飯田康之・吉原宏・秋葉恭子・岡田富美子・中川弘美・斎藤秀子・塚田悟・吉原茂・金子晃基・中山悟・広瀬好子・荒巻英栄・金丸雅子・須藤玲子・木村典子・松田智子・国府田さな江・飯塚弘幸・栗原紀子・花井和枝・横山真紀・柴山由貴子・弦巻佳織里・渡邊君子・小島康子・塚田亜希子・寺田淑弘・植木直子・鈴木友美子

(平成22年度)

石塚壽子・西山典子・野村早苗・大月洋子・平塚恵子・古谷理栄子・木田峰子・太田節子

(平成21年度)

山本眞実・谷中寿子・中島節子・関隆史

(平成20年度)

原田豊治・飯島由美子・飯塚恵美子・川村政恵・篠崙良重・高橋悦子・上野瑞穂

(平成19年度)

菊恵子・飯田康之・宇梶裕子・吉田幹夫・須田俊恵・長塚千佳・片倉克規

(平成18年度)

野口光江・小林米次郎・大澤敦子・根本守・岡野明彦・塩谷光美・浅見真太郎

参考引用文献

- 1) 尾形敬史・常総市立岡田小学校 (2009): 小学校における体育授業への柔道導入の実践的研究. 講道館柔道科学研究会紀要第12輯: 147-170
- 2) 竹内善徳、柔道指導者研究会編 (2000): 柔道の視点—21世紀へ向けて—. 道和書院: 2-11
- 3) 野々上綾 (2011): 小学校における武道(柔道)指導の継続に関する一考察—6年目の取り組みを対象にして—, 茨城大学平成23年度卒業論文
- 4) 葛野優維 (2010): 小学校における武道(柔道)授業の継続に関する一考察. 茨城大学平成22年度卒業論文
- 5) サントス・ミドリ (2009): 小学校における武道(柔道)指導の継続に関する一考察. 茨城大学平成21年度卒業論文
- 6) 小野村俊哉 (2008): 小学校における武道指導実践事業について. 茨城大学平成20年度卒業論文